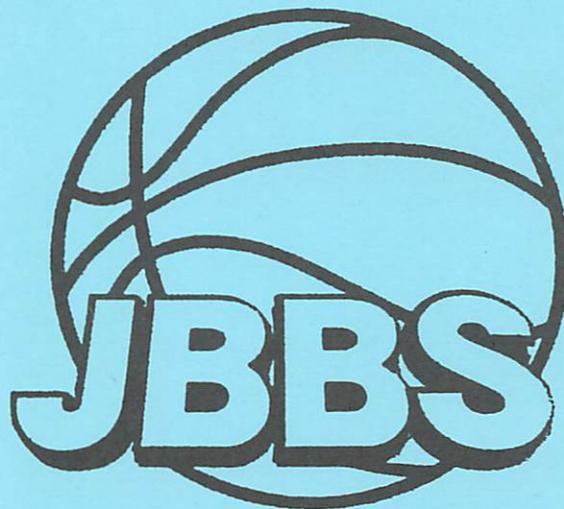


抜粋版

バスケットボールプラザ

Basketball Plaza

No:36



2008年2月

NPO法人 日本バスケットボール振興会

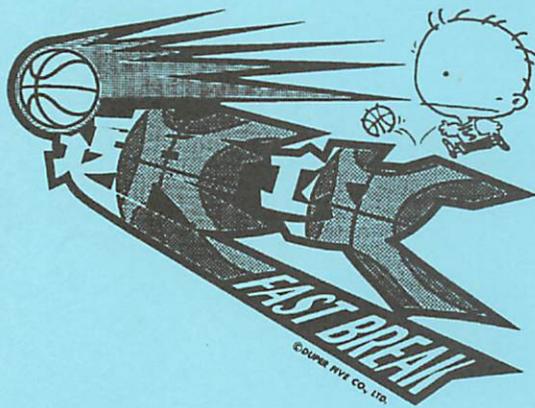


TEAM
WORK



ONE for ALL ALL for ONE

©DUPER FIVE CO., LTD.



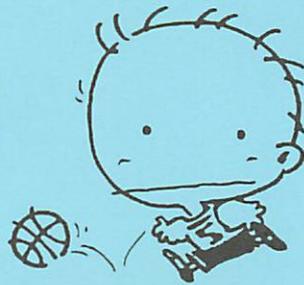
DEFENSE
FOOTWORK



©DUPER FIVE CO., LTD.



©DUPER FIVE CO., LTD.



DUPER.

表現の自由人。



©DUPER FIVE CO., LTD.

文武両道



DUPER.®

デューパーファイブ株式会社
〒130-0023 東京都墨田区立川3-3-5
TEL . (03)3632-7045 (代表)
FAX . (03)3632-8327

URL : <http://www.duper.co.jp>

E-mail: info@duper.co.jp

目 次

- NPO法人として社会貢献活動を推進・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
 スペシャルオリンピックス日本の活動支援
- 知的発達障害者のスポーツ (バスケットボール) について・・・・・・ 4
 上谷富彦氏講演概要
- スペシャルオリンピックス上海世界大会に参加して・・・・・・・・ 6
 日本選手団バスケットボール ヘッドコーチ 竹内 稔
- 北京オリンピック女子世界予選組み合わせ等決まる・・・・・・ 10
 編集部
- 特集 bjリーグ昨今・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 12
 河内コミッショナーに聞く 編集部
- 会員だより
 2006年の開放宣言・・・・・・・・・・・・・・・・ 島本 和彦・・ 17
 半世紀を経ての思い出・・・・・・・・・・・・ 梅戸 仁・・ 19
 我が青春バスケットボール・・・・・・・・・・ 藤田 武司・・ 21
 私とバスケットボール・・・・・・・・・・・・ 小池 春雄・・ 23
 ママさんチーム「緑地クラブ」と私・・・・ 楠野 幸子・・ 25
 まだ、ママさんバスケやっています・・・・ 高岡 治子・・ 27
- 全日本総合選手権大会結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 29
 優勝は男子 アイシン、女子 富士通 編集部
- 第38回全国高等学校選抜優勝大会結果・・・・・・・・・・・・・・ 34
 JOMOウィンターカップ2007 編集部
- 訃報・事務局だより・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 37
- プラザこぼればなし・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 38
 編集部

NPO法人として社会貢献活動を推進 スペシャルオリンピックス日本の活動支援

[編集部]

振興会が昨年NPO法人の認可を得てから社会的に貢献する活動が望まれていたが、このほど知的障害者のスポーツを推進している認定NPO団体「スペシャルオリンピックス日本・東京」に対して、支援を開始した。昨年10月に中国上海市において、4年に一度のスペシャルオリンピックス世界大会が開催されたが、この大会に出場するバスケットボール選手団に対していささかの寄付を行った。

この寄付に対してスペシャルオリンピックス日本・東京の池田理事長から下記のようなお礼状が届けられているので原文のまま紹介する。

スペシャルオリンピックス日本・東京は知的発達障害者のスポーツ全般を推進している認定NPO団体だが、日本において知的発達障害者のバスケットボールを専門にやっているFIDという団体もある。

振興会では、昨年秋に開催された秋季懇親会の前に、日ごろからスペシャルオリンピックスの活動に参加している当会上谷富彦理事を講師に迎え、知的障害者のスポーツについて理解を深めるために講演会を開催した。(講演概要後述)

.....

NPO法人日本バスケットボール振興会

会長 愛知 和男 様

認定NPO法人スペシャルオリンピックス日本・東京
理事長 池田 朝彦

謹啓 時下ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。平素はスペシャルオリンピックス日本・東京（SON東京）の活動にご支援、ご協力を賜り誠にありがとうございます。

このたびは、ご寄付を賜りまして厚く御礼申し上げます。頂きましたご厚志は、当会の事業のために大切に活用させていただきます。

おかげさまで、SON東京も、本年NPO法人4年目を迎え、登録アスリートは900名を超え、スポーツプログラムも15種目にまで増えてきました。これもひとえに、貴法人をはじめ、多くの皆様のご支援の賜物と心より感謝いたしております。どうぞ今後ともご支援、ご指導賜りますようお願い申し上げます。

末筆ではございますが、貴法人のご隆盛をお祈り申し上げます。

敬具

.....

スペシャルオリンピックス

上海世界大会に参加して

2007年スペシャルオリンピックス夏季世界大会
日本選手団 バスケットボール ヘッドコーチ
竹内 稔

スペシャルオリンピックス（以下、SOと略す）をご存知ですか？

SOとは、知的発達障害のある人の自立と社会参加を目指して、地域のスポーツトレーニングや競技会などの場を提供し、総合的かつ継続的な活動を支援する世界的なボランティア団体です。そもそもケネディ大統領時代のアメリカに端を発し、現在では世界170数カ国で250万人の選手（アスリートと呼ばれている）が参加しています。日本でも1990年代に活動が活発化し、現在SO日本には6,000人を超えるアスリートが都道府県単位のSO組織に登録しています。スポーツ競技は、陸上や水泳のような個人競技もあれば、バスケットボールやサッカーのような団体競技もあります。身体障害者のパラリンピックは、4年に一度のオリンピックと同地で開催するスポーツイベントとして認知度が高いのですが、残念ながらSOの方は今ひとつ理解されていない、というのが実情です。

そのスペシャルオリンピックスの4年に一度の夏季世界大会が、2007年10月初旬、上海で開催されました。2003年のアイルランド・ダブリンに続く12回目の世界大会です。実は2005年3月には長野で第8回冬季世界大会が実施され、それまでになくマスコミに取り上げられた結果、その後SO日本のアスリートやボランティアの登録数は増大しているのです。

さて、上海大会に話を戻しましょう。大会には世界各地から169カ国・7,000人以上のアスリートと3,500人の競技役員が集い、さらに40,000人のボランティアの協力で10月2日の開会式から11日の閉会式まで、滞りなく催されました。中国政府は2008年8月の北京オリンピックの試験運用的な観点からか、この大会に本腰を入れて取り組んでいたようでした。

開会式は8万人スタジアムと呼ばれる上海最大の上海運動場で催され、声援のために動員されたボランティアが会場を所狭しと埋め尽くし、胡錦濤国家主席もが参列するという熱の入れようでした。また国慶節と時期的に重なったためか、学校が休みで数多くの大学生ボランティアが競技会場用・選手団用に動員されていました。皆、オレンジ色のお揃いのTシャツ姿で、選手団の面倒を甲斐甲斐しくみてくれました。選手団の総数より



開会式

オレンジ軍団が圧倒的多数でやけに目に付く光景は、今にして思えば尋常ではありません。我々一行にも、全日程をほとんど変わらぬメンバー達が、通訳はもとより競技関連のサポートや宿舎外での食事・市内観光の随行に至るまで、まさに至れり尽せりのマンツーマンによ

る密着マークでした。街中には至るところにSOのポスターやノボリが満ち溢れ、テレビ等のマスコミ報道共々SO世界大会の雰囲気盛り上げていたようです。そういえば、タクシーの運転手もほぼ全員がオレンジTシャツ姿なのはさすがに閉口しました。中国が社会主義国であるということを否応無しに再認識した次第です。皆が皆、一応にSOに対する理解があるとはとても思えないのですが、ともあれ選手団としては有難いフォロー体制でした。

日本選手団は11競技に100名余が参加、バスケットボールチームの陣容は男子アスリート10名にコーチ3名というものでした。SOの規定として、2006年10月に熊本で開催された全国大会に出場しなければ、世界大会への参加資格はありません。熊本で私がヘッドコーチを務めたSO東京は、全7チームが参加した中の上位3チームのディビジョンで運良く優勝しました。そこで8名のアスリート共々、これまた幸運にも世界大会の代表に選ばれたわけです(残り2名は準優勝したSO千葉のアスリート)。

SO競技の最大の特徴としてディビジョニングというものがあります。これは競技能力を鑑みてグループ分けするシステムです。熊本大会の場合は上位3チーム、下位4チームに分類しそれぞれで優勝を競い合ったので、下位の優勝チームが上海代表に選抜される可能性も少なからずあったわけです。もとよりSOの理念は「アスリートファースト」であり「公平な機会の提供」というもので、強いほうが良い、勝てば良いというものではありません。選手宣誓の文言には『わたくしたちは精一杯力をだして勝利を目指します。たとえ、勝てなくても、頑張る勇気をあたえて下さい。』と記されています。つまり、世界大会といえども最強チームを編成して派遣するのではなく、日頃の各地域におけるプログラムの成果を発表する場、という捉え方です。従って、我々アスリート及びコーチ計13名は、SO日本のバスケットボールに関わる者の代表として、幸運にも上海世界大会でバスケットを楽しむことができたのです。

上海でのバスケットは驚きの連続でした。男子は43チーム(40カ国)が参加して競技に臨んだわけですが、技能・能力のバラツキには著しいものがありました。2チーム参加した米国の上位チームはダントツで、200センチ近い大男がダンクやアリュープのやり放題。一方ではまともなシュートが打てなかったり、バスケットというゲームを理解できていないアスリートがいるチームも登場しました。SOにおいて、前述のディビジョニングの必要性を痛感せざるを得ませんでした。初日に6分間のミニゲームを2試合(対アイルランド勝ち、対カザフスタン負け)して11ディビジョン中6番目に振り分けられました。翌日からディビジョニング戦で13分ハーフを3試合(対トルコ負け、対スイス勝ち、対韓国勝ち)行い、



日本選手団

結果として5番目のディビジョン(3チームのみ)に昇格して、しかもシード扱い。結局、本戦はたった1試合のみで、韓国を破った。ベラルーシと金メダルを争うことになりましたが、完敗してしまいました。それでもアスリート達は、6カ国との貴重な対戦と銀メダル獲得を稀有な思い出として喜んでいました。

SO日本チームは、16歳から27歳までの学生と社会人で構成、その実力は客観的に見て東

京都大会出場の中中学生程度です。180センチ・100kgのプレイヤーがビッグマンですが、さすがに世界大会では身体の大きさ、厚さが段違いでした。トルコやベラルーシには190センチ近いアスリートが何人もいて、それが走って跳んでスタミナもある・・・。

最初から体格差は懸念していたので、3:2ゾーンディフェンスから速攻主体のチームづくりを目指していましたが、走り勝負前に試合が終わってしまった、というのが率直な印象でした。しかしながら、日本のアスリートたちは良く頑張ったと胸を張って断言できます。顔馴染みになった各国コーチからは、「小さいけれどスピードがあって、良く鍛えられている」とコメントしてもらいました（外交辞令？）。

ちなみに、かの米国チームはSOには妥当な相手が見当たらないということなのか、エキシビジョンマッチで地元・上海交通大学体育会チーム（中国の大学でトップクラスとか）と対戦見事に引き分けて観客を沸かせていました。実はこの試合と同時進行で我々はベラルーシとの最終戦を隣接コートで競っていましたので、残念ながらこれを観戦することができませんでした。



日本対トルコ戦

本来、我々の試合を声援すべき応援ボランティアの観客は、正直なもので、ほとんどが米中戦に席を移してしまいました。

驚きはプレイ面だけではありませんでした。体育館の素晴らしさ（大きさ）には形容の仕様がありません。メイン会場の上海交通大学体育館は7,600席もあるそうです。ここにコートを2面とって、さらにサブコート（通常は試合前のウォーミングアップに使用とか）があり、ここも観客席は少ないながらもコート2面を設置してしまうほどのサイズです。

そこに応援要員として半ば義務的（？）に動員されたような小中学生とその父兄の観客集団。さらには至れり尽せりに準備された応援グッズの数々・・・。中国という国が『デカくて、ヒトが多くて、モノが溢れている』ことを改めて見せつけられました。そう言えば開会式翌日でバスケット競技開始前日、暇を持て余したアスリート達がどうしても練習したいと訴えるので、駄目もとでボランティア学生に懇願してみました。どんな手段を講じたのかは今もって不明なのですが、「とんでもない」体育館を無料で2時間確保してくれました。宿泊ホテルに程近い公共施設で3,500名収容の素晴らしいコートでした。

私は中学1年のときから40年近くバスケットに関わってきましたが、練習であれ程の施設を利用した経験はありません（日本のメッカ、代々木第2体育館ですら3,200席だそうです）。無人の3,500席の体育館で伸び伸びと練習できたことも、忘れられない思い出のひとつです。

そもそも私がSO東京のバスケット・プログラムに参加したのは2005年の4月頃からでした。大学時代に所属していたバスケット同好会・慶應義塾楽籠クラブの先輩達から、クラブ創立50周年の記念事業として「SO活動にボランティアとして参画」するので、現役の大学生達にも手伝ってもらいたい、という相談を受けました。ついでにはOB会で現役担当を務めていた私が、まずは実情を見学するように要請されました。なんでも楽籠クラブに話を

持ってきたのは慶應の大先輩、体育会バスケットの諏訪俊二さんや上谷富彦さんということでした。お二人はSO日本の設立当初からのコアメンバーで、今日でもSOコーチ・ボランティアの精神的支柱として精力的な活動をなさっています。

SO東京では6会場に200名近いアスリートが登録してバスケットを楽しんでいます。そこに何度か顔を出しているうちに、アスリートの笑顔やそのファミリーからの感謝の言葉でやめられなくなってしまいました。

仕事のオフにフィットネスクラブで汗を流すくらいなら、好きなバスケットに接していただけるし、クラブの昔の仲間にも会える、また喜ばれたり感謝されたりで多少の満足感もそこにはあったのでしょう。永らくバスケットをやってきたおかげで、健康な肉体と人並みの精神力、さらには掛け替えのない友を得ることができました。「バスケットで得たものはバスケットに返そう」が楽籠クラブの合言葉で、いまでは休日のほとんどがSO活動のスケジュールで埋まるほどになってしまいました。

ともあれ、SO活動の原点は、東京や日本の代表チームに選抜されるという華やかな表舞台にあるのではなく、アスリート諸君が日々のトレーニングを積み重ねて少しでも成長してゆくということなのです。

その意味では、上海の世界大会で貴重な体験を積んだアスリートが、仲間や後輩にその感動を伝えることが大切だと感じています。また、バスケットのレベルとしては一段上位に位置する彼等が、いずれはSOのコーチとしてアスリートを直接指導する立場になってくれたら、これに勝る喜びはありません。

上海での競技前の9月27日からホストタウンプログラム（中国の生活を体験する）で訪れた西安も含めると、彼等と共に17日間の共同生活をしてまいりました。今となつては、中国での夢のような体験のひとつひとつが、参加したアスリートの成長の糧となることを願って止みません。

以上

北京オリンピック女子世界予選 組み合わせ等決まる

[編集部]

今年8月9日（土）から24日（日）まで、中国北京市で開催されるオリンピックに出場するための女子世界予選の組み合わせ等が決まった。

北京オリンピック女子バスケットボールへの出場国は、各大陸（地区）を代表する1チームと開催国などを含めた7チーム（下記）が決定済み、それに今回開催される世界予選の上位5チーム、合計12チームとなっている。

この世界予選は、6月9日（月）から6月15日（日）までスペインのマドリード市において開催される。アジアからは日本とチャイニーズ・タイペイが出場するが、日本女子代表チームはなんとしても上位に入ってオリンピック出場を果たしてもらいたいと願う。

[オリンピック出場チーム]

中国 オーストラリア 韓国 アメリカ ロシア マリ ニュージーランド
世界予選出場チームから5チーム

[世界予選出場チーム]

アフリカ大陸 セネガル アンゴラ
アメリカ大陸 キューバ ブラジル アルゼンチン
アジア大陸 日本 チャイニーズ・タイペイ
ヨーロッパ大陸 スペイン ベラルーシ ラトビア チェコ
オセアニア地区 フィジー

[競技方法]

- ・予選ラウンド 出場12チームを3チームずつの4グループに分け、1回戦総当りでリーグ戦を行い、上位2チームが準々決勝へ進出する
- ・準々決勝 各グループ上位2チーム合計8チームによる対戦で、勝った4チームにオリンピック出場権が与えられる
- ・準決勝 準々決勝の敗者4チームでトーナメント戦を行い、勝者は決勝へ進出する
- ・決勝 準決勝の勝者が対戦し、勝ったチームにオリンピック出場権が与えられる

[予選ラウンド組み合わせ]

グループA	グループB	グループC	グループD
日本	アンゴラ	ブラジル	ベラルーシ
ラトビア	アルゼンチン	フィジー	チャイニーズ・タイペイ
セネガル	チェコ	スペイン	キューバ

[予選ラウンド日程]

月/日	グループ	対戦チーム	—	対戦チーム
6/9	A	ラトビア	VS	セネガル
	B	チェコ	VS	アルゼンチン
	C	スペイン	VS	フィジー
	D	チャイニーズ・タイペイ	VS	キューバ
6/10	A	セネガル	VS	日本
	B	アルゼンチン	VS	アンゴラ
	C	フィジー	VS	ブラジル
	D	キューバ	VS	ベラルーシ
6/11	A	日本	VS	ラトビア
	B	アンゴラ	VS	チェコ
	C	ブラジル	VS	スペイン
	D	ベラルーシ	VS	チャイニーズ・タイペイ

6/12は休息日

[準々決勝組み合わせ] この対戦で勝利したチームにオリンピック出場権が与えられる

月/日	No	対戦カード	
6/13	13	A 1位	VS B 2位
	14	B 1位	VS A 2位
	15	C 1位	VS D 2位
	16	D 1位	VS C 2位

[準決勝組み合わせ] この対戦で勝利した2チームが決勝へ進出する

月/日	No	対戦カード	
6/14	17	No 13の敗者	VS No 15の敗者
	18	No 14の敗者	VS No 16の敗者

[決勝] 準決勝の勝者が対戦し勝利したチームにオリンピック出場権が与えられる

6/15 No 17の勝者とNo 18の勝者が対戦

日本代表チームについては、WJBLがリーグ戦の最中とあってか、まだスタッフや選手をはじめとして、この世界予選に取り組む体制が確立、発表されていない。

6月に開催されるこの世界予選に向けて、WJBLのプレイオフ・ファイナルが終了する3月からすぐにでも強化に取り組んで、是が非でもオリンピック出場の切符を手にして、暗い話題が多かったバスケットボール界に明るい話題を提供して欲しい。

以上

特集

—— b j リーグ昨今 ——

河内コミッショナーに聞く

担当：編集部会

平成16年に6チームで発足したb j リーグだが、現在は10チーム編成となり全国各地でリーグ戦を展開している。ご覧になった方も多と思われるが、その会場に行くと楽しみながらバスケットが観戦できるという言葉を目にする。

地域密着型の興行が板についてきたb j リーグの様子について、東京田町の事務所を訪問し、河内敏光コミッショナーに突っ込んだ話を聞いてみた。

そこにはアマチュアスポーツにはない斬新さと、株式会社を経営するという厳しい経営感覚が感じられた。



河内敏光コミッショナー

昭和29年東京都出身、京北高校から明治大学に進み、卒業後三井生命に入り約10年間日本リーグで活躍、引退後は指導者としても活躍し、平成5年から平成7年まで男子全日本代表チームのヘッドコーチ、平成7年のアジア選手権で代表チームを3位に導く。

平成12年(株)新潟スポーツプロモーション代表取締役、平成17年に発足した株式会社b j リーグのコミッショナー兼代表取締役。

平成19年b j リーグコミッショナー専任。

—— 現在コミッショナーという仕事をされていますが、その仕事の内容についてご紹介ください。b j リーグ発足当初は社長という立場でしたが、社長との違いはなんのでしょうか？

日本のスポーツ界において、プロ野球を除いてはコミッショナーという立場があまりはつきりしていないのが現状です。しかしながら世界のメジャースポーツにおいては、例えばNBAのスターンさんのように必ずコミッショナーという立場の人がいて、そのスポーツまたはスポーツ団体の発展のために専門的な知識を持って活躍しているのが実情です。

バスケットボールというスポーツが日本でもメジャースポーツとして発展していくためにも、コミッショナーにおいてスポーツ現場でおきるあらゆる問題を的確に解決していくことが求められていると思います。

そんなわけでNBAを見習った形で、社長とコミッショナーはそれぞれ別の業務を担当していくことにしました。

—— b j リーグ発足当初は社長として活躍されていましたが、現在の社長はどなたがやっておられるのでしょうか？

現在b j リーグ社長は、(株)新潟スポーツプロモーション元代表取締役の中野秀光です。

b j リーグが発展していくには、チーム会社とリーグ会社がそれぞれ伸びていくことが求められます。

発足当初はそれこそ何もない状況で、金集めから人集め、企画から運営まですべてやらなければなりませんでしたので、バスケットボールを興行に結びつける専門的なことだけをやる余裕もありませんでした。そんなわけでそのころはコミッショナーという立場の人をおくなどということは考えられませんでした。

最近になって全体的にもどうにか軌道に乗り、経営の方も当初のプラン通りに発展してきましたので、経営とバスケットボールのことを専門的に扱う分野を分けた方が良いという結論に達し、社長とコミッショナーを分離しました。その結果、経営の方は中野社長にお願いし、私がコミッショナー業務に専念できるようになりました。

—— 当初のプラン通りに発展しつつあるということですが、観客動員についてもプラン通りに進んでいるのでしょうか？

順調に進んではいますが、正直言って当初描いていた構想と比較するとまだ物足りなさを感じています。これについては各チーム会社とリーグ会社の努力がまだ不足しているのではないかと認識しています。

観客動員数がプラン通りにいかない原因はさまざまですが、一番大きいことは体育館の問題です。それぞれのチーム会社が毎試合常時3,000人以上を収容できる会場を確保できれば、もっと早く観客動員数を計画通り達成できたと思いますが、地域によって体育館の確保が難しいところもあり悩みの種です。

現在どのチーム会社も地域密着型で興行する方式で活動していますが、とりわけ体育館の確保は他のバスケットボール団体と競合したり、他のスポーツ団体と競合したりして、年間の確保が困難な地域もあります。もっと公共の施設が多ければよいのですが、現状ではまだまだ不足しているといっているでしょう。

そんな環境の中でも今年は平均入場者数を1会場あたり3,000人にする目標を掲げて努力しております。

—— 全体の収支についてはいかがですか？

株式会社ですので、いつまでも赤字というわけにはいきません。当初の目標としては3年で単年度黒字というビジネス計画を立てましたが、現状では達成可能なチーム会社とそうでないところがあります。新潟や大阪は単年度黒字が見えてきていますが、新規に参入したチーム会社や、地域によっては今年度の黒字は難しそうです。

—— 東京アパッチは？

東京は観客的にはかなりの動員数となっていますが、体育館がコスト高の場所しか確保できないので、今年度黒字は困難と見ています。黒字化にはもう少し時間がかかるでしょう。

—— 東京アパッチというチームは若い人、特に中学生に人気があるようですね。

いままで観戦していただいた方々を分析してみると、その65%から70%がバスケットボール未経験者でした。日本でバスケットボールをやっているミニ、中学生、高校生までを含めて、その殆どは土曜日曜には部活などで練習をしています。b j リーグの日程か

らして、土曜日曜の開催が多いので、普段バスケットボールをやっている人たちだけをターゲットにしても観客数は伸びないと判断しました。それゆえ如何にして普段バスケットボールをやっていない、あるいは部活をしていない子供たちに会場へ足を運んでもらうかが観客動員の鍵となります。

一度会場に足を運んでいただいたとき、楽しかったと思っただけで帰ってもらえれば必ずその観客のリピーター化につながりますので、試合もさることながら会場で楽しく過ごしていただくイベントなどは常に工夫しています。

一方では入場料金の問題もあります。映画や他のスポーツ観戦を調べてみると、大体どこも1,500円から2,000円くらいで約2時間楽しめます。私たちもこのことを基準にして各会場の入場料を設定していますが、これ以上高いとやはり敬遠される要因になってしまいますので入場料金についても注意しています。

—— 昔、私たちも観客動員に頭を悩ませた時期がありましたが、バスケットボールの部活をやっていない子供たちを、ある程度ターゲットにしたヒントは何だったのでしょうか？

日本のアマチュアバスケットを振り返ってみると、どこの団体もそれなりに観客動員の努力はしてきたと思います。しかしながらバスケットボール関係者だけをターゲットにしていたのでは所詮行き詰ってしまうのです。かつてサッカーのJリーグはプロ野球を見習って観客動員数を伸ばしてきましたが、私たち後発のプロスポーツにおいては先発プロスポーツの良いところはどしどし見習って、取り入れていくことがポイントではないでしょうか。各チーム会社が如何にして地域に密着した活動をやるかということは、観客動員においても大きな要因のひとつですし、普段の地道な地域活動がものをいいます。特に地域におけるクリニックなどの社会奉仕的な活動は評価されるようです。

また海外のプロリーグの動向についても勉強するべく、昨年ヨーロッパリーグを観戦し、先方のコミッショナーとも会見して意見交換を行いました。NBAのスターンコミッショナーとも既に何度かお会いしており、今後ともこうした海外リーグとの連携を大切にしながら、bjリーグ発展の鍵を探していきたいと思っています。

—— なかなか意欲的に活動しておられるようですが、総体的に見てbjリーグ全体が発展していると感じましたが、河内さんからみてその評価は？

全チーム会社が黒字化することが理想ですが、一挙に実現することは困難です。しかしながら少しずつでも進化していれば周りの評価も上がるでしょうし、社内的にもやりがいにつながると確信しています。

私たちはプロリーグゆえに各チーム・リーグ会社が努力した結果については、ほとんど自分たちに還元されるシステムをとっていますが、これがないと運営はすぐに限界に突き当たってしまいます。また、経営者として還元することについては、いつも最大限気を配ることも必要なのです。

来年度チーム数を2チーム（浜松・東三河地域、滋賀）増やして全部で12チーム構成にしますが、それ以外にもbjリーグに参入したいという希望が複数きております。新規参入の球団にとって大体3年間くらいは赤字経営となりますので、それを支えてくれるスポンサーと地域が必要になります。特に地域性については厳しく検討し、観客動員を含めて密着した活動ができるかどうかを見極めて参入の是非を決めています。

一例ですが来年度参入する浜松・東三河は、本拠地を浜松市に置きます。浜松市は全国

の政令指定都市の中で唯一の“プロスポーツチーム”がなかった都市ですから、行政や地域の皆さんからの期待も高まっていますし、リーグとしても良好な地域性を保てると考えています。

—— 全体的なことについては良くわかりましたが、今度は各開催会場の運営についてお尋ねします。実際に観戦した方から、bjリーグ以外のバスケットボール団体はその開催運営方法など、良いところは見習うべきという意見が寄せられています。試合会場で河内さんをはじめとして運営者側が心がけていることはどんなことでしょうか？

私たちは株式会社として運営していますので、役員は常に経営者としての感覚ですべてを見なければなりません。会社にとってお客様は神様ですから、見に来てくれたお客様が満足しているかどうかを洞察することが大事です。

日本のバスケットボール会場で、コートサイドの一番上等な席が空席になっていることがよくありますが、これなどは会場の雰囲気悪くすることはあっても良くすることにはつながりませんので、私たちはこういう事態になったら臨機応変にお客様を良い席へと誘導します。

それゆえ試合中役員は、常に会場を見て回り観客の雰囲気をつかもうとしていて、試合の勝敗などは二の次です。また、観客にとってわかり難い審判の判定などについては、都度マイクを使って全体に説明するよう求めています。

—— 観客に対する各チーム会社の対応はどうですか？

毎月1回か2回、全てのチーム会社代表者を集めてさまざまな情報交換を行っています。特に観客動員については、各チーム会社とも利益につながることで、かなり敏感に詳細に検討し合っております。たとえば1会場で7,000人の観客を集められた試合があったとすると、その事前準備や宣伝方法、地域行政との連携などお互い隠さないで情報交換し、次の開催に備えるといった具合です。そういう情報はある意味では企業秘密なのですが、私たちの場合お互いが良い施策を取り入れて全体のレベルUPを図ることが先決と思ってやっています。

今年比較的観客動員数が多いチーム会社をあげると、東京、大阪、高松、大分、新潟といったところです。

—— お聞きする限りでは発展が続き、これからが楽しみです。

お陰さまでやっと一歩踏み出せたという感じですが発足当初は大変でした。日本におけるバスケットボールのプロ化については、今までいろいろな方々が勉強され検討されてきましたが、最終的に実行へ踏み出せなかったというのが現実だったのだと思います。

私は、勇気を持って踏み出したことによって賛同者が増え、理解してくれる観客が増えているのだと感じています。

当時、踏み出すことについては相当のパワーが必要でした。一番気にかけては参加してくれたチームを潰してはいけないということでしたので、各チームを維持存続していくためのスポンサー集めに走り回りましたね。

—— 日本におけるバスケットボールの発展という意味では、プロでもアマチュアでもメジャーになっていけばよいと思いますが。

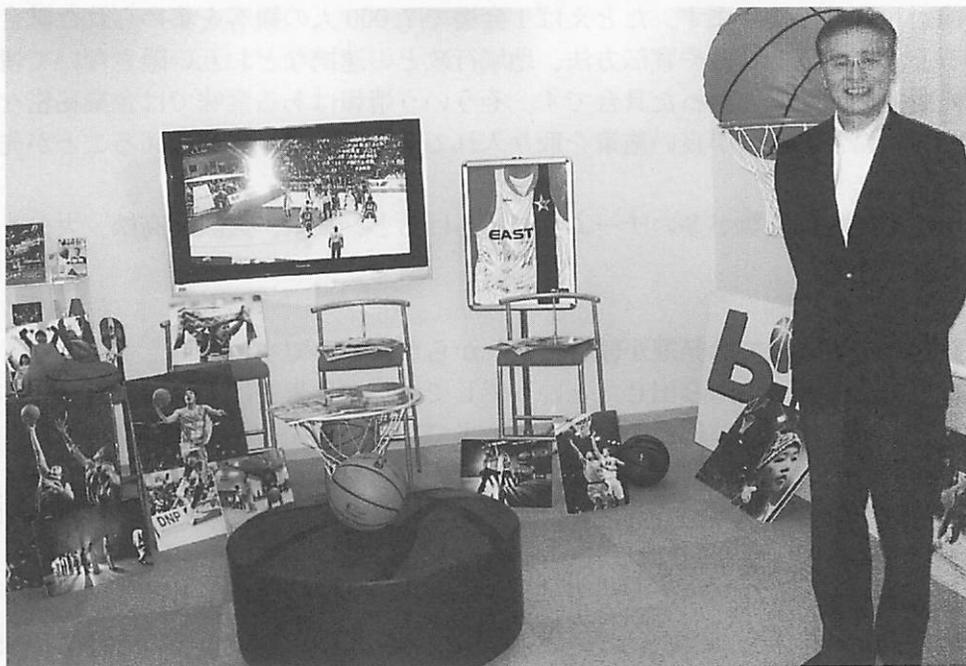
現在日本の大学でバスケットボールをやっている人口は、4年生だけで約2,400人位いますが、これらの学生が卒業した後ほんの一部の人しかバスケットボールを続けられないのが現状です。バスケットボールを続けたいと思っても、受け入れる器がないのが現実で、能力のある選手がその能力を生かしきれいていません。世界と対等に戦うための強化ももちろん必要なことですが、全体の層が薄くなっている事態も注視しなければなりません。

良い選手がより多くバスケットボールを続ければ、全体のレベルも上がることでしょうし、そのことが普及につながり更には強化にもつながると思うのです。バスケットボールをやっていた学生が卒業した後、実業団またはプロに進むことは彼らの選択肢として自由であっていいと思います。このような観点からbjリーグは日本全国のブロック別学生大会に対して、協賛を行ってきましたし、本人の希望があれば受け入れることを阻害するつもりはまったくありません。

—— これは理想論かも知れませんが、JBLの優勝チームとbjリーグの優勝チームが対戦して、プロとアマチュアの交流戦をやったら面白いと思いますがいかがですか。

大賛成ですし、そういう機会ができれば積極的に参加したいと思います。選手もそういうことは望んでいると思いますし、日本のバスケットボール発展のためにもいい考え方ではないでしょうか。日本のバスケットボール界が一丸となって普及、発展に心がければ、必然的にレベル強化にもつながると思っています。

—— 本日はお忙しい中ありがとうございました。



REUSE を考える

[環境の総合情報商社]

“地球にやさしく” どこかで見たような聞いたような言葉。

あなたはリサイクルに関心を持っていますか？

“地球環境をこれ以上汚したくない”これが私たちの願いで

あるとともに、人類に課せられた大きな課題です。

当社は携帯電話やパソコンなど、鉄を除いた金属（レアメタル）の回収、再生（リサイクル）を主な業務にしている会社です。

日本のバスケットボールの振興、発展を応援します。

リユース・ビズテック 株式会社

〒333-0842

埼玉県川口市前川2-33-1

TEL 048-263-7023

FAX 048-269-8009

代表取締役 永野 鉄洋

molten[®]
For the real game



For the real game

「プレイヤーの技術や意志が100%発揮される時、スポーツは本物になる」

私たちモルテン・ブランドは、この信念をもとに

世界に類のないボールと

スポーツエキップメント・メーカーとして

つねに完璧な製品づくりを目指しています。

本大会唯一の公式試合球

BGL7
GL7 国際公認球 検定球
貼り・天然皮革、7号球



www.molten.co.jp

株式会社 **モルテン** 東京本社 〒130-0003 東京都墨田区横川15丁目5-7